ぐるり散策　大月風土記伝説の巻　井上文次郎

九、【南伊豆町手石浜の阿弥陀窟の不思議】

筆者は昨年十月、南伊豆町手石浜に、およし伝説の由来を尋ねたところ、南伊豆町商工会会長長田裕二郎氏に遭い、阿弥陀窟の由来が、笹子の伝説と同様、二百キロ先の彼の地にあり、今尚　毎年十万人を越える参詣者で賑あう祭典が盛大に挙行されていると聞かされた。また　南伊豆では、この伝説の阿弥陀窟を、文化遺産として、町を挙げて保存に力を入れ、国指定天然記念物、伊豆七不思議の一つとして、観光に役立てている。当大月市とは、文化財に対する大いなる政策の相違を感じた。

【南豆古跡阿弥陀窟縁起】

そもそも手石阿弥陀窟の、由来を尋ねるに、嘉禄年中、親鸞聖人、甲州等々力の精舎に詣で給いし頃、同国都留の郡、羽置の荘笹子山の麓、阿弥陀海道という、駅宿の邊、葦の窪という所、この池に、小俣左衛門乃尉何某とかやいえる者あり。かれが娘に、「をよし」といえるは、容貌たおやかにして、暁の露を凝らす粧い春柳の風にたわめる風情有りしとなり。其の頃京都しんてい（朝廷に仕える高官）の御連枝何其とかやいし御方、いと嫣然なる、雲の鬢、浮世の塵は、物憂しと無常を観じて落とし、悉達太子の昔を思し召すにや夜半に、王城を忍出させ給い、遠近超えて此の山里の鶴寸もしらぬ柴の庵に、すみそめの御衣に、名を陰おはせしが、彼の女、この僧のいともけだかきおん風情を、見まいらするに、二十歳の夏の花一両蓮柳髪は散らぬれど、亭々として外心なき君子ならめ。あわれ、比人に契りを結ばんものと思いそめ、艶書にて口説きまいらすれども、其の志鉄石の如く、御いらへなき（胃議）によって、をよしは、思いの焔に身を焦がすえん婆伽が古、松浦の昔も劣るまじと思いにせまり、終に笹子の流、荒川の浪に身を投死失せぬ。時に其の悪念毒龍と成て、彼御僧を追い詰め巻絞め巻締めければついに空しく成り給う。それよりして人を悩ます事、其の数をしらず。其の住所を葦が淵といい、又葦が窪と号す。昔は百数十間のつちばし有りしとなり。聖人、このつちばしを御通行有りければ、怪しき女惚然現れ出で、涙を流し、聖人を礼拝し奉り、大士我を助け給えと、云て、掻消すごとくに失せぬ。時に小俣左衛門不思議の夢の告げによって聖人を拝請し奉り香をたいて我が家を清め、亡女閉麗多道薦抜の御供養をねがい奉る。これによって。聖人、度衆生大慈大悲の筏に乗じ薩婆若海に浮、一唱弥陀号即滅無量罪帆を張って、忝も、手に筆を染めて礫に弥陀の名号を書き給い、葦が淵に投げ御とぶらいありければ、彼女は観音大士の御姿と現じ、殺され給いし御僧は勢至大士の御姿と現じ、光明赫々として十方を照らして禮謝せらる。時に不思議なるかな名号の石、淵の中より飛揚がり、二菩薩の先に立ち西南をさし、白こうの光を放って飛び給う。其の停給う所は、渺渺たる大海の涯、潮汐乃さし来る岩窟の中、今に不思議の霊験かぞえるに、いとまあらず。聖人手ずから書き給う石と、云うよりこの所を手石村と号す。蒼々たる悪龍、忽然成仏し来て、東海に現じ給うによって、寺を東海山青龍寺と号し傳たり。宜哉彼佛、海中に現じ給う事因を略して果を擧げ。初中終の。詳審を省くといえども、弘誓深如海、龍女成仏し、南方の無垢刹に現じ給える示相にして云彼云此まことに、日本無双の霊場なり。熟伏惟ればじゅんゑん逆縁平等に、利益し給うといえども、我々ごとき凡夫をして生涯の中に、悪心を、翻させんがため、且は上根、中根、下根、其信心の浅さと深さによって、如来の御丈域は、丈六、域は五寸、七寸と拝し奉るもあり。下劣断善の凡夫に至っては、只黒闇ばかりなりと、笑うもあり。

如是霊験、一船に一坐しながら、其差別有こと、尋常人の恐るる所なり。是全、生きては悪心を翻させ、死しては後生善所の蓮のうてなに、誘引が為、如来種々の身を現じて、済度し給う事は、経典に演説し給うがごとし。何ぞ我宗、他宗と論ぜん

あに神儒佛を争哉。庶幾所は、衆善奉行、諸悪莫作、天下泰平、後生善所たらしめんが為なりと。「可信可迎可拝可嘆。阿弥陀窟與鳩合霊及吹潮あな同波脈絡相通　此三霊總日金剛窟也　往古有一龍窟宅乎此感通　文覚師。侍明之勝縁而稟生於人間是其縁コ也有偈日一龍會窟宅。雲雨雄雌情。一夕聞奇韻。連宵哭声感。何図消罪業。却好失威獰。天寿同時殄。士風別処生。女魂去聖狭男魂転王城。彼欲離三悪。此猶懐不平因縁峨難断絶。恩愛自纏エイ。独復幽蟉故俱忘繾綣盟。細書深願力。六字大慈悲。頓為圓眞現。忽然正覚成聖容従北到。精爽向西行。残照銘玄石余光耀碧瀛南方無垢刹。霊跡固分明。鳩合霊。又日覇図霊　是文覚聖人結界持明之霊也。（経文）」

註
手石文化財・史跡一覧によれば、阿弥陀窟には、満潮の時、船にて入ると、三体の観音様が金色の光を放って見えるとの事で、この不思議な光景を見るため、遊覧船が出る。
手石浜阿弥陀窟は、南伊豆でも著名な海水浴場弓ヶ浜に隣接した岬で、この岬の下に位置します。
この岬が阿弥陀山で、文化財として、大切に保存されている。

毒蛇済度旧跡標柱

葦　池

参考文献
甲斐国史
北都留郡誌。
心に舞う２「岩殿」。
故郷道中記笹子乃今昔。
南豆古跡阿弥陀窟縁起

執筆者　井上　文次郎

五月号へつづく…